

1/13 付け記事で、純子というショッキングな高校生を登場させる。しかし、4/27 には小さなおわび記事が紙面に掲載される。渡辺淳一が最終回 (1/31) で、「小説家は身勝手に残酷な稼業」と書いていたので、書き過ぎによる筆禍と思われる。

* 記事引用；日本経済新聞より

【第三種郵便物認可】

私の履歴書

わた 淳一

⑫

見の報が新聞にのった。場所は、釧路に近い、阿寒湖を見下せる山あいの雪の中、赤いコートを着て突っ伏したまま死んでいたという。

発見者は、近くの営林署の署員とかで、「4月に入り、雪が解けはじめたので、発見することができた」と語っていたとか。

「これは、彼女が阿寒に行

冬の夜、彼女は受験勉強をしているわたしのために、わざわざ3キロ近い道歩いて、わたしの家まで来て、勉強部屋の窓の下に赤いカーネーションを置いてくれたのだ。わたしはそう思い、そのままでくれた純子に感動した。

やっぱり、彼女は俺を一番愛してくれていたのだ。

阿寒湖畔の死

翌日、学校に行くとともに、純子の親友だった女の子に、「純子は、今日は何時に来るかな」ときくと、「純子は今朝一番の急行で釧路に行ったから、当然、帰って来ないよ」といわれた。

「こんな冬に、なぜそんな

ミステリアスな最期

遺書代わり、7人の男に花

がて新聞に、「天才少女画家、阿寒で失踪」という記事が出た。それを讀むと、彼女は3日前、「雪の阿寒湖を描きに行く」といってホテルを出たまま、消息が不明だとい

うた。わたしはなぜ死んだのか、それはわたしにはわからなかった。家族の人もわからないようだった。

だがわたしは、彼女が死の直前、わたしの部屋の窓の下に、赤いカーネーションを置いていったことを秘かに思っているが、一番いいと思うので「渡します」といわれた。

さらには教授は、純子と肉関係があり、阿寒に発つ前夜の、札幌の教授の家の前に赤

いカーネーションを置いていたこと、さらに彼女の肺核は偽りで、「肺結核は演じていただけです」と教えてくれた。

では、あの校庭につくりかけた雪像を真紅に彩めたものはなんだったのか。ただ、みなを驚かすための紅い溶液であったのか。

わたしはすべてわからなくなったが、このとき、教授からいただいた純子の「死に顔」の絵は、今もわたしの札幌文学館に展示されている。

(作家)



純子が残した「死に顔」の絵

2013. 4. 27

作家、渡辺淳一氏からの申し出により以下のおわびを掲載します。

「私が1月に連載した『私の履歴書』(13日付)における札幌医科大学のある教授と純子との関係について、事実と相違する記述があり、関係者およびそのご家族にご迷惑をお掛けしたことをおわびします。」

渡辺淳一